

## 地域計画特論(4) 禪の思想と西田哲学(無の探求)

2005. 4. 15. 作成  
2012. 6. 06. 修正

- 仏教における実践
- 禪とは
- 禪の基本思想
- 六祖壇経
- 西田哲学と禪
- 禪と日本文化



Kinkakuji Temple, Kyoto

## ■これまでの復習(自性のない空)

われわれのまわりの空



きれいなものはきれい しんどいものはしんどい  
楽しいことは楽しい おもしろいものはおもしろい

ほんとの  
自由

## ■仏教における修行(実践)

仏教は「宗教」であって、「思想」ではないから  
⇒ 理論(哲学)を精緻化することは重要ではあるが  
実践(生活への応用)がないと宗教的意義がない

理論と実践の枠組みはいろいろ分野にもある  
(このように理解すると、位置づけが理解しやすい)

- ・理学 ⇔ 工学
- ・経済学 ⇔ 経営学
- ・心理学 ⇔ 精神医学
- ・都市工学 ⇔ 都市計画
- ・交通工学 ⇔ 交通計画
- ・語学 ⇔ 会話

### 「修行」の方法を示す

修行とは「欠けたところ  
を補う」作業である

⇒ いわば仏教の技術的側面について考える

## ■仏教における実践方法

要するに「空」の世界を理解した執着のない境地に至る  
ための方法論(具体的技術)

1) ヨーガ ⇒ 身体的な修行 ⇒ 一部「禪」にいたる

- < ヨーガは健康法のようになってしまった >
- < 瞑想によって心を無にするアフローチ >
- < 中国で完成された方法 >

2) 密教: 自由にいけるようになる ⇒ 神通力を身につける

- < 自分を高める修行をして、超能力を得る >
- < 大日如来: 宇宙と一体化する >
- < インド・チベット仏教の形態 >

3) 阿弥陀さまのいうとおりする(自分をなくす) ⇒ 極楽に行く

- < 念仏をとる >
- < 鎌倉仏教: 他力本願 >

## ■禅(dhyana)とは

禅は訳して静慮(じょうりょ)とし、同じ系統の三昧(samadhi)と合して禅定(ぜんじょう)または禅観と訳す。具体化して、坐禅・習禅・参禅・宴坐などの類語を生む。

もともとインドの精神文明に共通するヨーガの実践過程のうち精神の浄化法の一段階であったが、仏教にとりこまれて主体的精神的傾向を強めたもの。

さらに、ニルヴァーナはゴータマ・ブッダのとき以来つねに瞑想の内容であった。しかし中国において、老荘思想的変質をして、「物我同根」「万物一体」の瞑想に置き換えられた。



## ■中国の禅宗

- 初祖: 達磨(だるま)(382?~532)
- 二祖: 慧可(えか)(487~593)
- 三祖: 僧 璨(そうさん)
- 四祖: 道信(どうしん)(580~651)
- 五祖: 弘忍(くんにん)(601~674)
- 六祖: 慧能(えのう)(638~674)

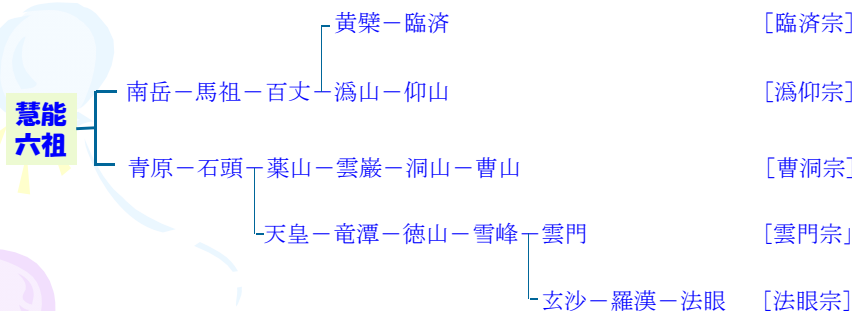


南インドの王国の第三王子として生まれ、中国で活躍した仏教の僧侶。5世紀後半から6世紀前半の人。中国禅の開祖。「景德傳燈録」によれば釈迦から教えて28代目とされている。インドから中国南方へ渡海し、洛陽郊外の高山少林寺にて面壁を行う。確認されているだけで曇林、慧可の弟子がいる。彼の宗派は当初楞伽宗と呼ばれた。彼の事績、言行を記録した語録とされるものに「二入四行論」などがある。

## ■五家七宗

弘忍(五祖)の弟子:

神秀(北宗禅)・・・長安の権力と結託、則天武后に重んじられた  
慧能(南宗禅)・・・現在伝わっているものは全部こちらである



⇒日本では「臨済宗」と「曹洞宗」(とくに前者は鎌倉幕府に支持された)

## ■応病与薬(その1)

一切の経論はみな心を起こす教えにすぎぬ。道という心を起こすとたちまち巧偽が生まれて有事のなかにおちこむ。心がおこらなければ、なんで座禅する要があろう「二入四行論」



### 応病与薬

坐禅とは・・・起こった心を静めるための対症療法(乱れた心を制する技術)

病まぬのに、薬はいらない。病まぬ人に薬を与えるのは、わざわざ病人をつくるようなもの。  
⇒ 最良の薬は、病まぬことである。

## ■応病与薬(その2)

応病与薬のもうひとつの意味:



病人に対する的確な薬を与える。  
万人に効く薬はない。個々の病状に対して、良薬を与えるのが  
名医である。

人は本来健康という「最良薬」を臨機に生かして与える。

⇒ **フツダ**は状況、立場などに応じて、**喩え話**を用いた  
**「方便」という**

⇒ **研究でも利用できる**  
**どこで発表するのか**  
**だれに説明するのか**  
**を考えて、説明の方法をかえること**

## ■禅の基本思想(1)

不立文字・教外別伝・直指人心・見性成佛の四項目で整理される

### ●不立文字

哲学的に言えば、概念的智識を絶したところにある。  
有であるとか無であるとか、論理的な思考を絶したところ  
にある。經典に頼ってはいけぬ。概念に頼ってはいけぬ。



### ●教外別伝

他の仏教の学派はぜんぶ經典を中心とした教学をもっているが  
禅は教理以外に別に伝えられるのだということ。どんな經典で  
も生かせる。一つの經典に束縛されないということ。

## ■禅の基本思想(2)

### ●直指人心(じきしにんしん)

人間の本来の心は清浄(じょうじょう)であるということ。  
人間の心は鏡のようなものである。きれいなものをうつすと  
きれいなものがうつる。きたないものをうつすと、鏡もきた  
なくなる。しかし、鏡の価値が減るものではない。(⇒後述)

**一指は「空」の象徴である…唐の具胝(ぐてい)和尚**

### ●見性成佛

本来われわれがもっている「仏性」を見て、仏になること。  
本来自分は仏になる仏性をもっているのだ、それを表して  
いくのであるということ。



## ■六祖壇経(その1)

慧能の父の本籍は范陽、左遷で嶺南に行き、新州の百姓。  
(中国では、南方人は野蛮人と見た)



五祖弘忍との出会い:

弘忍和尚、慧能に問うて曰く、汝、いづくの人ぞ、此の山に來たいて吾を礼拝す。  
汝、今吾辺に向かつてまた荷物を求むるや。

慧能答えて曰く、弟子はこれ嶺南の人、新州の百姓なり、今ことさらに、遠く來  
たいて和尚を礼拝す。余物をもとめず、ただ作仏の法を求む。

大師遂に慧能を責めて曰く、汝は是れ嶺南の人、またはれ獼猴(かろう)、  
いづくんぞ、作仏するに堪えん。

慧能答えて曰く、人は即ち南北あるも、仏性は即ち南北なし、獼猴の身、和尚  
と同じからず。仏性何の差別あらんや。

## ■六祖壇經(その2)

伝衣事件: 禪の法を誰に伝授するか(伝授のしるしの袈裟)  
門人に詩を作らして、さとの心境に至ったものに伝授する

弘忍(五祖)が門人に依頼:



身は是菩提樹、心は明鏡の台(うてな)の如し  
時々勤めて拭拭し、塵埃(じんあい)有らしむるなかれ

- ⇒ 神秀がつくる。(誠実な自己反省の人)
- ⇒ 弘忍評価: 凡夫はこの詩で修行すれば墮落しないが、無上菩提については門前に来たただけで中にははいれない

菩提本(もと)樹無し、明鏡また台無し  
仏性常に清浄、何処にか塵埃有らん

- ⇒ 慧能がつくる。(無学の米つき)
- ⇒ 弘忍は、「金剛教」を説き、袈裟を与えて「六祖」とした

## ■鏡のたとえ

精神の内奥にひそむ不思議な動きを鏡にたとえる



鏡は自由にもものを映すが、映したものによって明鏡そのものは変化しない(靈妙という)。

⇒「般若心経」のなかの「不増不減」と同じ

明鏡はものが来るからうつすけれども、ものがうつらないからといって、無くなるわけではない。むしろ何もうつしていないときに、明鏡の真価が発揮される。

鏡の神秘性、尊貴性を前提とする。誰もみな一様に一枚の古鏡をもっている。とくに鏡を尊貴とする必要はない。

⇒ 馬祖以降の「日常の絶対的肯定」の傾向

## ■絶対自由の思想

南岳懷讓と沙門道一の間答「伝灯録」

道一は毎日坐禅にはげんでいる熱心な沙門である

懷讓:「そなた、坐禅してどうするつもりだ」

道一:「仏になりたいのです」

懷讓:「一枚の瓦を手にとり、庵前の石の上で磨きはじめる」

道一:「先生、何をなされる」

懷讓:「磨いて鏡にする」

道一:「瓦を磨いて、なにが鏡になるものか」

懷讓:「坐禅して、なにが仏になるものか」

道一:「どうすればよろしいか」

懷讓:「たとえばだ、人が牛車にのって進まないとき、車を打つか、牛をうつか」

道一:「……………」

懷讓:「君は坐禅しているのか、それとも坐ったフツダのまねをしているのか、坐禅なら、禅は坐臥にかかわらぬし、坐ったフツダなら、フツダは禅定の姿にかかわらぬ。真理はどこにも居坐らぬ。ことさら取捨してはならぬ。君は坐ったフツダを学んでフツダを殺している。坐禅にとらわれるのは、禅に達する道ではない。」

## ■西田哲学(1)

京都学派

西田幾多郎(1870~1945)



主観(認識主体)と客観(認識対象)との二元的対立から、出発する西洋近代の哲学を批判し、人間が実在に直接ふれられている経験として「純粹経験」を見出した。

経験といふのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹といふのは、普通に経験といっても居る者も其実は何等かの思想を交へて居るから、毫も思慮分別を加へない、真に経験其儘の状態をいふのである。例へば、色を見、音を聞く刹那、未だ之が外物の作用であるとか、我が之を感じて居るというやうな考のないのみならず、此音は何であるという判断すら加はらない前をいふのである。

純粹経験に於ては 未だ知情意の分離なく、唯一の活動である様に、又未だ主観客観の対立もない。主観客観の対立は我々の思惟の要求より出てくるので、直接経験の事実ではない。直接経験の上に於ては唯独立自全の一事実であるのみである。見る主観もなければ見らるる客観もない。恰も我々が美妙なる音楽に心を奪はれ、物我相忘れ、天地唯喟然たる一楽声のみなるが如く、此刹那所謂実在が現前して居る。

## ■西田哲学(2)

元來我々の身体は大体に於いて自己の生命の保持発展する為に自ら適当なる運動をなすように作られており、意識は此運動に副うて発生するので、始は単純なる苦楽の情である。然るに外界に対する観念が次第に明瞭となり且つ連想作用が活発になると共に、前の運動は外界刺激に対して無意識に発せずして、先ず結果の観念を想起し、之より其の手段となるべき運動の観念を伴い、而して後運動に移るといふ風になる。〔善の研究：行為上〕

**純粹経験とは自己が眞の自己になりきること。眞の自己を知ること。眞の自己は宇宙の本体であり、そこに究極の眞実がある。**

善とは一言にていえば人格の実現である。之を内より見れば、真摯なる要求の満足、即ち意識の統一であって、其極は自他相忘れ、主客相没するといふ所に至らねばならぬ。〔善の研究：第十三章完全なる善行〕

宗教的要求は自己に対する要求である。自己の生命に就いての要求である。我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知すると共に、絶対無限の力に合一して之に由りて永遠の眞生命を得んと欲するの要求である。〔善の研究：第四編宗教〕

**無の境地を哲学的に「絶対的矛盾的自己同一論」に展開していった。**

## ■禅と日本文化

鈴木大拙(1870~1966)

明治3年10月18日、石川県金沢市本多町に生まれる。本名、鈴木貞太郎。石川県専門学校(後、第四高等中学校)時代に、西田幾多郎と出会い、生涯の友となる。中途退学し、一時英語教師となるが、上京して、東京専門学校(後、早稲田大学)、東京帝国大学に学ぶ。この頃から本格的に坐禅に取り組み始める。見性して、師釈宗演より「大拙」の居士号を受ける。明治30年に渡米し、足掛け12年間を過ごす。帰国後、学習院教授、大谷大学教授などを歴任。日本と欧米を行き来しつつ、仏教の研究と普及に精力を注いだ。昭和41年7月12日、96歳で逝去。

**禅を中心に日本文化を世界的に広めた功績は多大である。しかしながら、日本の宗教を賛美したことから、当時(戦争)の国家主義への協力という意味で批判的な評価もある。**



## ■禅の心による日本文化

禅の二面性:

- 1) 静かな観照の世界、あらゆるものを遠く見離す孤絶したさびた境地。
- 2) すべての煩惱を一瞬にして断ち切り、無限に自由な世界にあそぶ強さ。

⇒ 庭園、茶道、など多数の日本文化を形成した。

● 景観の見方の提案:

金閣寺、銀閣寺、哲学の道など、人工的な景観デザインではなく、花は花、柳は柳心の鏡に写し出されるときに、acceptableな(納得のいく)自然風景というものがあのような気がする。

<筆者の意見>



## ■今回の参考文献

1. 末木文美士、近代日本と仏教、近代日本の思想・再考II、トランスビュー、2004。
2. 佐藤正英・片山洋之助共編著：新制チャート式シリーズ 新倫理、数研出版、1998。
3. 西田幾多郎：善の研究、岩波文庫、1950。
4. 柳田聖山：禅思想、その原型をあらう、中公新書、1975。
5. 中村・福永・田村・今野編：岩波仏教辞典、岩波書店、1989。
6. 鎌田茂雄：禅とはなにか、講談社現代新書、1986。
7. 鈴木大拙：禅とは何か、角川文庫、1955。
8. 柳田聖山・梅原猛：仏教の思想7 無の探求<中国禅>、角川書店、1969。